

2011年5月9日～17日の間、気仙沼市にてボランティア作業に従事してきました。
以下に見聞内容をご報告します。

概要

- ・ 社会福祉協議会が募集している災害ボランティアに参加し、9日間作業を行いました。
- ・ 事前登録不要な日雇い方式であり、作業内容も各種あるので誰でも単身参加可能です。
- ・ 1日のみの参加も可能ですが、2～3日程度参加できるのが理想的。(理由後述)
- ・ ボランティアが現場入りできるのは、比較的被害の少なかった地域のみ(それでも周囲は全壊家屋ばかりですが・・・)。被害の大きな処は手つかずのままであり、長期にわたっての継続的なボランティア活動が必要とされます。
- ・ 従って、多くの人が交代で参加しながら、報道だけでは感じ取れない被害の大きさを目の当たりにすること、そしてそれを持ち帰って多くの人に伝えることが求められています。
- ・ 気仙沼市でも手つかずの酷い地域があります。更に他の市町村、例えば隣の陸前高田市では、2ヶ月以上を経た今でも、市役所を含めた市の中心部が廃墟状態のままです。
- ・ 被災地で何か少しでも再開すると『今日から〇〇が復旧しました』と大々的に報道されますが、それは条件付きの部分的・限定的な復旧であることが多く、完全復旧を意味しません。
- ・ 従って、年単位での長期的スパンでのボランティアが求められますし、同時並行で雇用創出に繋がる支援が必要です。



2ヶ月経っても、いまだ手つかずの被災地区の方が多いのです。

詳報

【災害復旧の実施状態】

気仙沼市での災害復旧作業は、幾つもの団体により同時並行で行われています。

例を挙げると、自衛隊や警察による道路・仮設橋・風呂などの施設復旧、瓦礫撤去、行方不明者捜索、市役所による大規模避難所の運営、支援物資輸送(各避難所へ)、仮設住宅建設、市役所から委託を受けた建設会社による道路復旧や瓦礫回収などです。

居住者や田畑の所有者は、瓦礫や土砂を敷地外の指定場所(道路脇など)に搬出すれば、市役所側が回収してくれるようになっていますが、個人でこの搬出作業やその後の清掃を行うのは並大抵のことではありません。

そこで、地元住民等の要望に基づき、一般人でもできる作業のお手伝いを募集・派遣しているのが社会福祉協議会です。

一方で、被害の大きな地区、市役所から離れた地区では、手つかずの地区が多く残っており、今でも警察による行方不明者捜索が継続されている地区もあります。



2ヶ月経っても撤去されないままのタンクローリー車

【災害ボランティアの受付とマッチング】

気仙沼ボランティアセンター(母体は気仙沼市社会福祉協議会)が募集しているボランティア活動に参加しました。(ちなみに気仙沼市内には、3つのボランティアセンターがあります)

参加方法は幾つかありますが、私は事前受付不要で毎日個人単位で受付する「日雇い式(?)」での参加となりました。初回の受付時に特技があれば受付用紙に書き込みます。(通訳ができるとか、大型免許を持っているとか)

受付をすませたボランティア達は、待機所に集まり、マッチングをして派遣先現場を決定します。このマッチングは、ボランティアセンタースタッフが『(例)一般家屋の床上へドロ搬出作業、男性10名、希望者ありますか?』と声をかけ、希望者が手を挙げる、という方式なので、「自分には無理かな?」と思う作業には行かずに済むようになっています。

ここで手を挙げて一緒に作業することになった人の集まりが、チームです。ひとりリーダーを決めます。メンバーは毎日入れ替わり組み変わるので、どんどん連帯意識が芽生えていきます。

出発前には「顔見知りでチームが組めるグループ参加でないと、現地の役に立たない」という噂を聞きましたが、実際に現地に行ってみたらそんなことはありませんでした。むしろ個人単位で参加する人は、問題意識や社会意識が高く様々なスキルがある人が多く、お互い補完し合ったり教え合ったりしながら作業ができます。また少しずつ人が入れ替わっていくので、過去のチームの経験値が引き継がれていくのです。私個人にとっても貴重な経験と出会いの場でした。

個人参加者は、1日目は初心者でも、2日目には経験者、3日目にはベテランとしてどんどん先輩になっていきます。実際に自分の五感を駆使して現状把握すること、知らない人同士がコミュニケーションして仲間になっていくこと、協力して成し遂げること、成果を喜んでもらうこと、感謝されること、達成感を持ち翌日の任務に意欲を持つこと。現代社会で忘れ去りそうなことですが、すべて大事なことです。人の役に立ちながら、自らも学び直せる気がしました。(自分たちのことを傭兵部隊と呼んでいました。)

グループ参加の場合は、完全に二手に分かれるようです。

セミプロ集団(例えば、横浜市消防団の方々)がグループ参加される場合、かなり高い戦闘能力を発揮するので、一般ボランティアのマッチングより前にハードルの高い現場への投入が決まっています。

ボランティアツアーとして団体でやってくる一般人集団は、過去の経験を引き継ぐこともなく、また自分たちの経験値を引き渡すこともできないので、ゴミ拾いなどの軽作業のみに従事することが多いようです。

またボランティアには、一般住居などでの撤去系や掃除系の作業の他、

- (1) 避難所での作業
- (2) 支援物資の仕分け
- (3) ボランティアセンターの運営スタッフ

などの任務がありますが、気仙沼では(1)・(2)は一般からの募集が停止されており、(3)は、数週間単位の長期滞在者が充てられていました。ちなみに私が行ったときは、矢上の院生2名が運営スタッフをやっていました。この辺りの状況は、被災地毎のボランティアセンターによって違って来ようです。

また、ボランティアセンター運営スタッフには、①マッチング班 ②資材班 ③車輜班 ④救護班 ⑤医療班などがあり、きめ細かく対応してくれます。

一般ボランティアの作業内容は様々で、派遣現場も毎日変わりますが、私は主に、屋内からの瓦礫撤去、ヘドロ搬出、家屋の一部解体など、(自分にとって)面白そうなものを選びました。

05/08	唐桑地区	漁火パーク	市民楽団による慰問演奏(飛び入り)
05/09	南町地区	戸建住居	床上清掃
05/10	南郷地区	戸建住居	床下ヘドロ搬出・側溝ヘドロ搬出
05/11	南町地区	歯科医院	屋内瓦礫撤去・ヘドロ搬出・屋外瓦礫移動
05/12	南町地区	居酒屋テナント	床板撤去・床下ヘドロ搬出・側溝ヘドロ搬出
05/13	幸町地区	戸建住居	屋外瓦礫撤去・ヘドロ搬出
05/14	南郷地区	屋外駐車場	ヘドロ撤去
05/15	河原田地区	戸建住居	床板撤去・床下ヘドロ搬出・瓦礫搬出・台所解体
05/16	南町地区	歯科医院	2階住居部分 被災家具搬出・清掃
05/17	波路上地区	水田	瓦礫&コンクリート構造物撤去



ボランティアセンターにある登録受付所

【災害ボランティアの1日】

受付・マッチングを経て、作業内容とチームが決まると、必要な器材(スコップ・一輪車・洗浄機など)・資材(土嚢袋・水など)を選び出し、ボランティアセンターの車輛で依頼主が待つ現地まで送ってもらいます。

休憩を取りつつ、依頼された作業内容が完了するか、撤収時刻(15:00)まで作業したら、ボランティアセンターに配車依頼し、人員と器材・資材を回収してもらいます。ボランティアセンターに帰着したら、器材を洗浄して返却し、活動報告をして、チームを解散して1日の任務完了です。

●タイムテーブルとしてはこんな感じ

- 08:30 受付開始
- 09:00 オリエンテーション・マッチング
- 09:30 移動
- 10:00 現場到着 / 依頼主の立ち会いの下 作業開始
- 12:00 昼食(個人携行)
- 13:00 作業再開
- 15:00 現場撤収
- 15:30 ボランティアセンター到着 器材洗浄
- 16:00 解散

●風呂

ボランティアセンターから車で5～30分で行ける範囲に、4箇所入浴施設がありました。ちょっと待つこともあるけれど、毎日入浴できます。

- 自衛隊風呂は無料(但し男女時間別)
- 駅前銭湯 友の湯 400円
- 大曲コミュニティセンター200円
- 森の湯(隣町)320円、

●宿泊

市内数カ所、隣町にも数カ所、ホテルなど宿泊施設(有料)があります。また、車中泊、テント泊も可能。(藤岡は10日間車中泊でした)

● 洗濯

市内2箇所コインランドリーあり。夕方は待たずに利用可能。

● 買い物・飲食

幾つかのスーパーや飲食店は普通に営業再開しています。

肉も野菜も買えます。プリンやゼリーとかも売っていて、品揃えもこっちのスーパーと変わりません。賑わっては居ますが、旧ソ連のパンの配給みたく長蛇の列で並ぶ必要はありません。お金があれば買えます。お寿司もラーメンも、幾つかの飲食店では普通に食べられます。

私も10日30食分のカロリーメイト持参で現地入りしたのに、あまりに普通にスーパーで売っているし、私が買ったところで地元の人を買う分が無くなるような状態ではなかったので、おやつとかを買ってしまいました。

でもここで疑問が生まれます ~ 震災前と比べてスーパーも飲食店も数が激減しているのにレジが激混みでないのはなぜ？ 供給が足りているように見えるのは何故？

自宅が全壊や大規模半壊して避難所にいるので買い物不要の人もいますが、それだけではありません。結局お金が無くて買えない人が多いのです。

正確に言うと、手持ち現金がないから買えない、少しの手持ちはあるけど収入がないから買い控えたい、車がないから遠くまで買いに行けない、などの人がいるようです。結局、雇用がなくて先行き不安で、減多には買えない、ってことみたいです。

日々の生活の糧の支援はもちろんのこと、雇用につながる支援は重要です。

● 給油

経由・レギュラー・ハイオクともに、普通に給油できます。



生乾きのため車内に干される洗濯物。もうあと10分コインランドリーで乾燥機使えばよかった・・・

【被災地の状況】

- ボランティアが入れるのは、比較的被害が少なかった地域に限られるが、そういったエリアだけでも膨大な数の建物がある。側溝清掃なども早期に貫通させないと、虫の発生や疫病など、二次被害が増える恐れがある。
- 壊滅的地区も多い。壊滅的とは決してオーバーな表現ではなく、その字義通りのひどい状態であり、いまだ自衛隊や警察、自治体からの指示による建設業者しか入れない状態で、都市計画が未確定なこともあり、復旧させる目処すら立っていない模様。
- 今回、陸前高田市にも足を伸ばしましたが、気仙沼よりさらにひどい状態です。海際に立っている団地は4階までは波が貫通し、5階も波がかぶっており、屋上にいなければ助からない状態。コンクリート製の建物でも、基礎部分を空に向けながらごろごろ転がったりする有様で、市役所を中心とする中核部分は、廃墟状態のままです。



跨線橋から、陸前高田市の中心部を見る。2ヶ月経っても瓦礫と化した街のほかにも見えない。



海岸沿いに立つ団地。4階までは津波の衝撃に貫かれ、5階まで波があがっている。

【ボランティアの社会的必要性】

普通に生活している家庭でも、自分たちだけで引っ越しの準備をしようと思うと、結構大変だったりします。友人に手助けを頼んだり、お金があれば引っ越しサービスを頼むところです。被災地では、家も庭も破壊され、壊れた家財道具が散乱し、床上にも床下にもうずたかくへドロや瓦礫が積もっている・・・かなりの確率で自動車まで転がっている。こんな状態です。これを片付けるのに、家族だけでやれと言っても、正直精根尽きてしまう・・・業者は手が回らない、友人知人だって被災している。そこでボランティアの出番となります。

そして作業を通じて復旧の一翼を担うことだけでなく、依頼主(被災者)とゆっくり話を交わすことで、被災者は応援してくれる人がいることを実感し、ボランティアは報道ではわからない被災地の現状を知り、地元に戻って伝えることができます。

都合がつかずならば、ぜひ一度参加されることをお勧めします。

【ボランティアのやりがい】

見返りを求めてボランティアに行くわけではありませんが、やはり依頼主さんが喜んでくれたり、一緒に作業して達成感があったり、作業の結果が役に立ったりすれば、嬉しくやりがいを感じるものです。全ての依頼主さんはボランティアに感謝してくださいましたし、(必要ないのに)茶菓食事を配慮してくださる方が多かったので、ほぼ毎回やりがいを感じることができました。

ただ希に(感謝の気持ちはあるものの)、「困っていてどこから何をすればいいのかわからないけど、とりあえずタダだから頼んでみた」みたいな方もいたりします。依頼者が現地をよく見て調べて、何をどう改善したいのかアイデアがないと、駆けつけたボランティアも手伝えることがありませんし、無意味な作業に従事するのも気が乗らないものです。その辺も考えるといるんな現場がありますので、1日だけでなく数日参加されるとよいと思います。

【ボランティア日記】

以下は、藤岡主観によるボランティア日記です。
客観性は全くありません。

《0日目》05/08（日）

唐桑地区 漁火パーク 市民楽団による慰問演奏(飛び入り)

この日は、ボランティアではなく、単なる私の趣味の領域です。

気仙沼市民吹奏楽団による慰問演奏開始の一時間前に漁火パークに着くと、友達(気仙沼人)の車は皆無。場所を間違えたのか不安になるも、時間が経つにつれちよくちよく集まってくる。ほとんどは震災後初めて合う仲間ばかりなのでとても嬉しいし、自分が居て驚く顔を見るのも楽しい。

被災者自らが被災者を慰問する今回の演奏、私も飛び入りさせてもらいました。

参加できる人だけでの演奏だから、楽器編成もまちまちですが、聞く人にも吹く人にも、一足ずつ立ち直ろうとする気持ちが見えました。

《1日目》05/09（月）

南町地区 戸建住居 床上清掃

男性3名指定の現場。飛騨から来たリタイヤ組のK本さんと、大阪から来た19歳のK川さんとともに、戸建て住居の床上清掃に向かいました。3人ともボランティア初参加。大規模半壊と認定された住居は、60歳過ぎの女性が一人暮らし。1階の真ん中まで浸水して、近くの人や仙台に出ている息子たちの手伝いでドロ出しやヘドロ搬出が終わったところでした。水は使えますが、電気は使えません。

モップや雑巾を使って床板や建具を清掃していきます。作り付けの引出しは、海水が染みためあけることができず、棚の中の食器類にはまだ海水が・・・「これが津波か」と思うと空恐ろしくなりますが、これも洗って、綺麗にした棚に再収納します。サンリオ系のかわいい食器が一式ありました。お孫さんのものだそうです。

システムキッチン・建具・サッシを入れ替えたり、畳を新しくしたり、まだまだ大変ですが、年内には再び住めるようにしたいと仰っていました。お孫さんがまた笑顔で遊びに来てくれる、そんな町に戻るよう祈らずにはられません。

《2日目》05/10（火）

南郷地区 戸建住居 床下ヘドロ搬出・側溝ヘドロ搬出

男性10名指定の現場。東京から長期ボランティアで活動中のK藤さんをリーダーに、現地入り。1階の天井あたりまで海水があがった地域ですが、全壊家屋と半壊家屋がモザイク状に存在しています。さまざまな要因が命運を分けたのでしょう。

伺ったお宅は、2階は無事だが1階は柱を残して全壊・・・といった有様でした。

まず角スコップで床下のヘドロを掻き上げ、土嚢袋に詰めていきます。あっという間に土嚢が百以上積み上がります。ヘドロは重油を吸っているの、鼻をつくにおいもあり、粘性も

高く、作業するに気合いが入ります。でも力だけでなく、ガラスや釘などを分類しながらの、気遣いも必要な作業です。でも、志を同じくするボランティア同士だからか、すぐうちとけて、自然に作業分担し、チームワークが効くようになってきます。

床下へドロをどけた後は、水と電気が使える現場だったので、高圧洗浄機で床下を清掃します。

次は周囲の側溝清掃。道路上の瓦礫は割と片付いているけれど、側溝はドロと瓦礫で完全に埋まっています。側溝のコンクリ蓋も津波でとばされてなくなっていたり粉々になっていたり・・・ 男10名で黙々とドブさらい、土嚢袋入れ、土嚢運びを繰り返します。2時間の作業で清掃できたのは長さにしてたったの25メートル。町中の側溝を開通させるには、人海戦術で頑張るしかありません。

お昼は、10人もいるボランティアメンバー全員にお弁当を出してくださいました。感謝です。



高圧洗浄機で洗うとかなり綺麗になります。でも水・電気が復旧してない場所では使えません。

《3日目》05/11（水）

南町地区 歯科医院 屋内瓦礫撤去・ドロ搬出・屋外瓦礫移動

港のすぐ横、エースポート脇の歯医者さんでの作業です。満潮になると周囲が冠水してしまうエリアで、主要道路は50cmほど砂利盛りされています。水も電気も通っていません。

北九州からボランティアに来たKさん（大連から来日されて21年、阪神大震災でもボランティア入りされた達人）をリーダーに、男性15名で現場入りしました。大人数でまごつくかと思いきや、さすがのKさんの手際よい指示でドロのかぶった医療機器・待合室の据え付け椅子などを手際よく解体・撤去、ドロを土嚢に詰め、瓦礫を搬出していきます。とても素人集

団とは思えない素晴らしさで、私も随分経験値を上げました。一日以上掛かるかと思われた待合室・診察室の片付けが昼までに終わりました。

さらに奥に行くと、細い廊下の先に準備室や資料室のような空間が現れました。目の高さでは、裏の壁が抜けているので港が見えますが、廊下もその先の部屋も腰の高さまでの瓦礫とヘドロで床がどこなのかわからない・・・どうやら目の前の全壊家屋の瓦礫がこの部屋に詰め込まれているようです。正直これは素人には無理だろう、と私は諦めかけました。でもなんとかしてあげたい、というのがボランティアのみんなの意志、誰ともなく無心に作業を再開します。私も、ともかくネコ(作業用の手押し輪車のこと)が通れるようにとの思いで、廊下の瓦礫やヘドロと戦います。

しばらくは、やれどもやれども成果が上がった感じのしない黙々とした作業がひたすら続きます。

でも、誰かが床まで掘り起こすとそこからが(精神的には)速いです。目標を見付けてとターボが入る感じ。結局こちらの部屋も少し時間を余して終了。残った時間は外のうち捨てられた瓦礫の移動を行いました。(指定場所のない瓦礫は、市役所側の重機が持って行ってくれません。燃えるゴミと同じです。)これだけの作業ができたのは、リーダーKさんの見事な差配によるチームワークと、各員のモチベーションの高さによるものだと思います。

依頼主さんも感激してくれたのか、最後は記念撮影でメとなりました。



作業終了後の風景。膝下まであった瓦礫とヘドロが撤去され、かなり綺麗になりました。

《4日目》05/12(木)

南町地区 居酒屋テナント 床板撤去・床下ヘドロ搬出・側溝ヘドロ搬出

前日と同じくKさんに率いられ男性10名で現場入り。

裏山から道路側に抜ける側溝の清掃と、店舗内の床板解体・撤去・床下ヘドロ搬出が任務

でした。

正直なところ、この店の廻りの建物はほぼ全壊し、跡形もなくなっているのに、側溝も一部しか残っていない有様でした。依頼主によると、雨が降ると山から水が出て、建物がなくなってしまった裏の敷地に溜まってしまうので、なんとかしたいとのことでした。でも、裏の土地は土砂頃削り取られて凹地になっているので、水が溜まるのはどうしようもありません。ともかく現存する側溝を清掃し、泥濘地の脇に仮設の側溝をあつらえました。

ただ、凹地に重機で土入れしないと抜本的解決には至らず、また雨が降ったら元の本阿弥かも・・・と思うとちょっと残念でした。

ヘドロを角スコップで掻き出しているとき、トランプのハートのA 1枚を見つけました。

一瞬不謹慎にも、何かいいことあるかな？って思いましたが、別段何もありませんでした。

《5日目》05/13（金）

幸町地区 戸建住居 屋外瓦礫撤去・ヘドロ搬出

現地が雨予報だったためか、この日受付したボランティアが少なかったため、男性10名を予定していたところへ減員8名で現場入り。家屋内は自力で対処されたとのこと、そこそこ綺麗になっていましたが、玄関の前には人の背丈より高いヘドロの山がそびえ、崩落したカーポートの屋根越しに見えるその奥の庭には、瓦礫や畳や自動車が散乱していました。

手前の山をどけないと話にならないので、ヘドロの山を削っては土嚢袋に押し込みます。こう言うシーンでは剣スコップが役立つのですが、相手はただの土塊ならず、大小様々な物体を含有しているので、一筋縄ではいきません。ときどき、発掘作業のように埋蔵物の周囲のヘドロを削り取り、そいつを掘り起こしてからでないと進めないことがしばしば・・・その上途中、雨天下でのテント泊での疲れがでた隊員1名が救護班に回収され、さらに減って総勢7名に。道路をはさんだ向かいの現場では、ボランティアツアーの人たちが凄い人口密度でゴミ拾いをしています。内心数人分けて欲しいと思いつつながら、作業を続行していると、なんとかブロック敷きの庭の表面がでてきました。

ようやく山が崩せたので、カーポートの残骸を撤去し、庭に積もったヘドロをそのまま掘り進めます。どこの水産工場から流れ着いたのか、新巻鮭とか、サンマとか、いろんなものが発掘され、異臭を放ちます。臭いに堪りかねた数人が戦線離脱していきます。（ちなみに前職で鍛えた結果らしく、他の人に比べると藤岡は異臭系に強いようです。）

主立った瓦礫とヘドロと畳を撤去してこの日の作業は終わりとなりました。

巨大な鶏小屋の残骸と、自動車は我々の手には負えません。この日の作業で重機が庭に入れるようになったので、依頼主から業者に依頼してもらうことにしました。（ちなみに自衛隊員は、小型の車輛なら人力で運ぶそうです・・・さすが！）

なおこの日は、ヘドロ山のなかからランプの JOKER 1 枚を発掘しました。どうやら私はランプに好かれているようですが、JOKER なのでなにか悪いことが起こるのかと思いきや、別段何もありませんでした。



午前中いっぱい掛けて高さ2メートルのヘドロ山を切り崩した後。午後は庭の瓦礫・ヘドロ撤去にあたった。

《6日目》05/14（土）

南郷地区 屋外駐車場 ヘドロ撤去

この日は、マッチング作業に手違いが発生。我がチーム10名で屋内ヘドロだしへ出撃しようとしたら、そこはダブルブッキングで他の隊が先行しているとのことで再マッチング。次に行った現場は、昨日全ての作業が完了済みでやることなし。時間を空費してしまうことを少し残念に思ったけれども、マッチングを差配しているスタッフだってみなボランティアで必死に対応しているのです。誰にだってミスはありえることなので、腹を立てたりするメンバーは居ませんでした。一端ボランティアセンターへ戻ると、マッチングスタッフさんが平謝りでしたが、むしろチーム側から「30分でドロだし終えて帰ってきたよ」なんて、冗談を言い合うような暖かい雰囲気がありました。

三度目の正直で決まった任務は、5名単位の現場×2だったので、隊を二つに分けそれぞれ現場に向かうことに。我々が行ったのは車が30台くらいはとめられるような大きさの屋外の月極駐車場。10センチくらいヘドロが積もっているので、出遅れた分を取り戻すべく、角スコップでヘドロを掻き上げ、土嚢袋に詰め続ける。箇所によっては重油分を多く含むため、重いだけでなくヘドロが粘っくてスコップが刺さらず、相当な力が必要になりました。

途中休憩すると、依頼主と一緒に作業している奥さんが、お茶やおにぎり、唐揚げまで差し入れてくださり、一堂感謝の思いに包まれました。被災者の方と、ボランティアの我々と、お互いの事情を思いやりながら、それぞれ自分たちのできることをしようと努力する、これは人間が社会生活を営む上で、一番根底にあるべきことだなと感じ、そして被災地という社会

(街)の一部が失われている場面で、それを確認できたことに深い感銘を覚えました。

袋詰めされた土嚢は400袋近くになり、駐車場の隅々から集めるだけでも重労働。積み上げると普通トラック一台分くらいの山になりました。

この日の現場は、実は重機があればあらかじめ片付けられ、あとは細かいところを人力で仕上げれば済むような作業でもあります。しかし、重機はもっと困難な場所で使われていて、こんな現場に割く余裕はないし、こういったヘドロを放置しておくといろんなところに流出して悪さをします。だから、人海戦術でも何とか手早く片付けてしまわなければなりません。そう思うとともに有意義な1日でした。



土嚢袋の山。400袋近くあります。結構な奥行きもあります。

《7日目》05/15（日）

河原田地区 戸建住居 床板撤去・床下ヘドロ搬出・瓦礫搬出・台所解体

この日は市街中心部で、市民会館や気仙沼中学校といった主要施設がある山に続く河原田地区。わりと傾斜のある坂道沿いの地区なので、天国と地獄の一線がくっきりわかれています。

10名で伺った住居は、1階上部まで津波に呑まれ、床下がヘドロだらけ。

依頼主が床板を2/3程度はがしていたので、その床下のヘドロ出し、残り1/3の床板の撤去、システムキッチンの解体撤去、物置小屋内の瓦礫撤去などを行いました。

床板撤去(はがし)は、通常ボランティアで行う作業ではありません。(難易度的に一般人がやる作業でないとされています。)しかし、何日も現場にいて慣れてきたり、詳しい人に教わったりするうちに、対応してしまえるようになります。

私もいつの間にかシステムキッチンの解体や撤去を難なくこなせるようになっていました。

また、母屋の隣の倒れかけた物置小屋に詰め込まれた瓦礫(元々あったものでなく、外から

詰まってきた瓦礫)を撤去する作業も行いました。物置小屋ごと倒れてくる可能性があるので、本来なら見送った方がいい作業なのですが、「なんとかしてあげたい」という気持ちがみんなを動かし、ちょっとばかりの安全確認をただけで作業を行ってしまうのでした。この心理については、《9日目》の項目で詳述します。

《8日目》05/16（月）

南町地区 歯科医院 2階住居部分 被災家具搬出・清掃

3日目にいった歯科医院の、住居部分の作業でした。この日、私は初めてリーダーを拝命しました。メンバー男性15名のうち、「新燃岳ではお世話になりましたので」と遠路宮崎から駆けつけてきた看護師3名は、医療班は足りていたとのことで土木作業での参加でした。

土埃のようなヘドロが床にこびりついていますが、ヘドロの厚みとしてはたいしたことないので、あっという間に終わる清掃作業と考えていました。が、さにあらず。

まず2階に続く外階段への突入路を確保しなければなりません。階段前の大きな瓦礫を撤去して、無数の小さな瓦礫の上に廃棄物を敷き詰めて通路を作ります。

つぎに不要な家具を屋外に撤去するのですが、捨てて欲しいと言われた本棚の本が濡れたせいでふくらんで取り出せずバールやフライヤーをつかって引っ張り出すなど厄介で、大型の家具もなかなか解体・撤去に手間取りました。

床の埃は箒とちりとりで掃いていきますが、こびりついたヘドロはデッキブラシや角スコップで擦らないととれない。など、作業は意外にも困難を極めました。

午前中いっぱい掛かってようやくドロ落としができたので、午後から床の水清掃をしたのですが、なにしろ水が出ない。ポリタンク入りの水を節約しながらのデッキブラシ、モップ、雑巾掛けになりました。ポリタンクの水も300リットルほど補給します。

「なんとか住めそうになったかも」と思ったときには、撤収時間の午後3時。ボランティアセンターのマッチング係担当者ののべ工数の見積りは、かなり正確だと悟った日でした。

《9日目》05/17（火）

波路上地区 水田 瓦礫&コンクリート構造物撤去

私の作業最終日は、10名で水田の瓦礫撤去でした。本日は、本職の腕利き大工さんや自衛官OBもいるなど、かなりハイスペックな派遣部隊になりました。

当初ビニールハウスの残骸撤去と聞いていたので意気揚々と重装備で伺ったのですが、依頼してもなかなかやっこないボランティア(申し込んでから派遣されるまでに何日もかかります)に途方に暮れた依頼主の80歳のおじいさんは、自分一人で解体撤去し、新しいハウスを建築中でした。震災前に軌道に乗せたイチゴ栽培を、これからもう一度再興させようという熱意に一同感嘆したのですが、我々は任務を失ってしまいました。

そこで急遽、手つかずの水田の瓦礫撤去となりました。ここでも私有地内の瓦礫は市役所では撤去してくれないので、道路まで運んで積み上げる必要があります。

遠目に見た水田は、ちょっとゴミがあるだけですぐ何とかなるんじゃないか、という感じなのですが、それは間違いでした。アルミ製の構造材、コンクリート片や木材はもちろん、瓦や巨大なコンクリート構造物まで散乱していました。とりあえず手で拾えるものから片付けていきますが、半分埋まっているものが多いので、すぐにスコップで掘り出さないと取り出せない状況になります。瓦を掘り出すとその下からまた瓦・・・まるで古代遺跡の発掘作業です。

ビニールハウスの骨材と思われる長いアルミ構造材も、非常に持ち運びにくい状態にねじ曲がっていて、数人掛かりで運びます。

一番やっかいなのは、コンクリート構造物。おそらく農業用水の側溝として使われていたコンクリートだと思うのですが、何基も転がっています。破損して小さくなっているものは、えいやっと持ち上げて一輪車にのせ、数名掛かりで運搬。もうちょっと大きなものは、一輪車2台をつかって、6名掛かりで運搬。そのようにして、だんだん経験値を上げていきました。

(1番デカイコンクリート受水槽は重機でないと無理と判断したので)最後に2番目にデカイ構造物を運ぶことになりました。いままでの経験からすれば10名でなんとか持ち上げられるギリギリの大きさ。一輪車が2台では潰れるかもしれないから4台使おうとか、みんなで相談します。「なんとかしてあげたい」との一心なのです。

でもそこで冷静になって考えてみました。自分がプラント建設の現場監督をやっていたときなら、この作業は安全対策上「絶対に人力でやらせてはいけない内容だ」と考えるはず。万が一爪先にでも落としたら、安全靴を履いていても無事でいられなさそうです。

私がそう思ったとき、他の誰かも同様に危険を察知したようで、「なんとかしてあげたいけれど、危険だ」という方向に相談が進んでいき、結局、ころころと転がせるだけ転がせて水田の端に寄せておくだけにしました。



水田に転がる瓦礫の数々。まばらに見えるが、水田の広さを考えると凄まじい量があります。

これは、7日目の崩れかけた物置小屋の話と共通する話です。積極的にやっていると、積極性と安全確保の線引きが難しい一面がでてくるのです。(ゆえに、ボランティアでは、床板剥がしとか、ややこしい作業は、本来やらないことになっているのでしょう。)

こういった意味でも、周囲の雰囲気にならされず、自己判断と自己責任で行動でき、お互い尊重しあえる感性がボランティアに求められているように感じました。この日は、難易度が高くてもやってみようという意欲と、冷静に安全を考えることが同時にできるメンバーばかりでとても心強い日でした。

だから、誰かがアレンジしてくれて、被災地に連れて行ってきて、現場では体だけ動かすつもののボランティアツアーでは、役立つ範囲が狭くなってしまうのかもしれない。

【所感】

初めて被災地入りしたボランティアは、作業現場に来ると例外なくその被害の大きさに声を失います。作業をしながら、こんな最悪の状態をどうしたら救えるのかと、真剣に悩みます。

でも、まだそれは最悪ではないのです。私は、日中の作業を終えて銭湯に向かう道すがら、新しく知り合ったボランティアさんを気仙沼の被災地域に案内しました。そこには、2ヶ月経ってもなんの復興も進まない焼けた鹿折地区の全景、いまなお立ち入り禁止区域で、瓦礫のピラミッドがそびえる南気仙沼駅近辺など・・・昼間見た最悪の光景を上回る惨状に、誰もが絶句し、ボランティア入りできる地区は、それでも被害の少なかった方だったのだと、知ります。

この街の壊れかた、被害の規模を思い、それが手つかずのまま残っていることを思うとき、復興までいったい何年かかるのか、地元民ならずとも途方に暮れてしまいます。

これが、東北沿岸 500 キロに渡り続いていることを忘れてはなりません。



被災して2ヶ月経っても、何も復興できない鹿折地区。火災の跡が痛々しい。

テレビ報道だけを見ていると、被災地はどんどん復旧しているように錯覚します。
それは、復旧したことだけが報道されるからです。また、ごく一部が回復しても、全面復旧したかのように、大々的にネタにされるからです。「手つかずに残っている」なんて事は、ニュースとして取り上げられないのです。

『3ヶ月経ったから、少しは落ち着いた』なんてことは絶対にありません。

現地にボランティアに行くのもいい、
行き届かないところを探して、物資を届けたっていい、

普通の人々が、普通に手をさしのべられるようになった今こそ、
震災のことを忘れず、できることを、何年でも支援していくことが、私たちに求められています。



漁船の重油備蓄用の巨大タンクは、市内の至る所に転がっています。

追伸：

3月・4月は、野菜や果物を届けることができました。

5月は、現地で片付けのお手伝いすることができました。

僕らにできることは、きっとまだあります。

皆様のご協力に心から感謝しつつ… 藤岡 将史 (KC38)